

Title	ケネス・ケニストン著『コミットせざる人びと』： アメリカ社会における疎外された若者
Sub Title	Kenneth Keniston: The Uncommitted; Alienated youth in American society New York, harcourt, brace & world, ine., 1965, viii+500 pp.
Author	奈良, 和重(Nara, Kazushige)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1967
Jtitle	法學研究：法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.40, No.4 (1967. 4) ,p.137- 141
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	紹介と批評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19670415-0137

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

紹介と批評

Kenneth Keniston:

The Uncommitted; Alienated Youth in

American Society

New York, Harcourt, Brace & World, Inc., 1965,

viii+500 pp.

ケネス・ケニストン著

『コミットせざる人びと』

——アメリカ社会における疎外された若者——

「今日構成されているような社会に適應しようなどという考えは私を恐怖の念でみたす。」「全世界が、殆んど理解も同情も慈悲もない、巨大な心なき非人間的機械のように、この眼に浮ぶもの悲しい陰鬱な時がある。」「私は自分というものが自分ではどうにもならない力に翻弄されているのだと時々感じる。」「私は最も親しい友達のあるものとも自分が如何に異なつたものかを強く感じている。」「私は本当に私を理解してくれる女性を生涯みつけられるとは思わない。」「私は自信というものがまるでない。」「私は日頃私の思想を自己自身に閉ざそうと努める。」「私は時折、もう一度子供であつたらと願うのだ。」「

大人げない、だが大人びた如何にも物言いたげな青年、そんな彼のベセティックな心象をこれらはよく写している。K・ケニストンの『American Ismael』——聖書物語のなかの悲劇的人物イシマエルに仮託されてそのように呼ばれている。現代アメリカの若者 *Ismael* が実際に語つた言葉なのだ。含羞、不信、不安、忿懣、*Ismael*、幸福の拒絶、父親への憎悪、母親への異常な愛情、母胎への思索、性への妄想と恐怖、ラスコールニコフに似た衝動……。ケニストンはこのインバートのうちにアメリカの疎外された若者のプロトタイプを認める。むしろ彼は典型的なアメリカ人とは懸けはなれた存在である。しかしそれはまさに非典型であるがゆえに、著者は典型のもつ緊張と問題性を理解するために重要視されるべきことを強調する。われわれはいささか奇異の感に打たれようが、現代のアメリカ社会にみられる若者の疎外意識は、いわゆる *the American way of life* そのものに内在する、極度に発展したテクノロジー的社会にはじめて発現した「新しい疎外」形態なのである。

ケニストンの疎外に関する概念と構想は "Alienation and the Decline of Utopia," *The American Scholar* (Vol. 29, No. 2, Spring 1960) として発表された。この論文は Hendrik M. Ruitenberg (ed.), *Varieties of Modern Social Theory*, New York, E. P. Dutton & Co., 1963, pp. 79-117. に収録されている。そして本書のなかでは、第一章、十一章、十三章、十四章などで一層詳しく展開されている。著者は永年疎外された学生、の心理学的研究を行つてきたが、それらが本書第一部「疎外された若者」の全六章にまとめられた——

その最初が先に記したアメリカのインシヤールというインバンの事例研究である。そしてこの心理学的分析が、第二部「疎外化しつつある社会」における社会学的分析によつて一層精緻にされている。

ケニストンのアプローチは心理学と社会学の二つの伝統を連繫するだけにとどまらず、一層複合的・動態的なものであることは、「われわれは疎外を生みださせる諸力を心理学的なもの、社会学的なもの、文化的なもの、歴史的なものとして概念化しようけれども、ある一定の時点においてこれらの諸力は個人の体験のなかに溶解されるものである。したがつて、《心理—社会—文化—歴史的》という煩瑣な語句によつてはじめて、この溶解というものをわれわれは適確に指摘できるのである」(二三八四頁)と述べられているところからも明らかである。とくに第二部の論述のなかには、心理学者としてはもとより、社会学者、そしてなんなる療法学者ではなく現代の疎外に対する思想家としての網眼さをわれわれはみることができよう。

さて、「疎外された若者」のイデオロギー、その生活スタイルを要約しておく。すでに述べたように、ケニストンのいう若者とは学生であり、ここに選ばれた研究対象はハーバード・カレッジに通学する最も知的な、ソフィステイテートされた学生たち(極端に疎外された者二十名、全く疎外されていない者二十名、そのいずれでもない《対照》グループ)である。それ故に疎外された若者といつても、いわゆるピート族、グリーンウィッチ・ヴレッジにたむろするボヘミアン、あるいは特定の人種集団でもマイケル・ハリントンのいう

the other Americans でもないことを注意すべきである。これらの学生にはそれぞれ自叙伝、抱懐する基本的諸価値の陳述を書かせ、二十枚のカードより成るT・A・T、その他の心理学的実験を受けさせた。質問紙表によるインタヴィユも繰返され、三年学期間に週二時間、学生たちは二〇〇時間あまりこの研究に協力した。彼らの生活史、信念、学生生活、家庭生活とはどのようなものか、ここでは本書に引用された具体的な例証や資料に触れることはできないが、凡そつぎの如くである。

平常は講義に出席し、学生寮で生活し、大学食堂で同僚と食事をとる。成績(人文科学への嗜好性がみられる)も平均的である。服装や日常作法も他の学生と目立つて異なつてもいないし、構内で問題を起したような記録もとくにない。にもかかわらず彼らは特異な知的スタイルを持つているのである。本書の標題が端的に示すように、彼らはなにごとにもコミットしない、そしてその限りでやはりひとつのイデオロギーを表現している。それはアメリカの伝統的価値、文化に対する社会的、政治的、市民的コミットメントの全面的拒否の態度である。哲学的には世界、人生は無意味なもので、なんら目的もない。心理学的には人間は理解不可能な恐怖の世界に取り囲まれた、孤独と不安に取り残されている。疎外された者の思想は素朴な実存主義である。神は死んだ。彼らはどのような積極的な価値をも所有せず、もつぱら《美学的》^{エステティック}目標、つまり自我の感情、情熱、表現を追求する。この絶対的個人主義というものは伝統的なアメリカの個人主義——社会内部において社会の善のために作用する——

ではなく、しばしば不条理の哲学、「理由なき反抗」なのである。

ところで、アメリカ生活一般における性的自己同一化は、ロマン化された精神分析学の好むテーマであるが、ケニストンは疎外された者のひとつの決定的要因として、家庭内での夫婦・子供の心理的葛藤を強調する。彼らの女性関係は永続させず、性に対しては恐怖心を抱き、性の受動性に導かれるのはなぜか？ この事實は家庭環境、とくに母親イメージが彼らの幼児期の《口唇帯》の快楽として残り、母親の子供への愛情とともに彼らの青年、成人となるプロセスに影響をあたえていることを明示している。疎外された若者の過去への憧憬と成人生活に対する嫌悪！「自分自身の挫折させられた野望を息子に注ぐ女性は夫を退くように駆り立てる。家庭からみずから《氣をそいでしまう》夫は妻にその子供にすべての注意を集中させるよう駆り立てる。われわれはこの悪循環が何処から始まったのか分らないのだ——」(三〇〇頁)。さらに社会学的コンテクストにおいては、アメリカ社会生活の断片化、伝統的コミュニティの喪失、世代の隔絶などのため誰もが自己同一化を求めているのだが、まさにその情緒的中心となるものが家庭である。しかしそこにおいて、夫の家庭中心的態度(Caminitism)は社会での挫折であり、他方彼の仕事中心的態度(Careerism)が仕事への強迫的逃避であるとすれば、家庭生活にこそ疎外のパラドクシカルな性質が見事にあらわれているというほかない。

しかしながら疎外とは、若者たちの両親の生活の反映とか批判にとどまるわけではない。むしろ、「疎外された者の見解は明らかに、

われわれの時代の思想的流れに関連しており、われわれがみな関係している知的傾向のいささか誇張した表現以外のなにものでもない。生育しうる、永続的な積極的価値を見出せない無能力さは、多くの、そして恐らく大部分のアメリカ人に共通したものである」(二九五頁)といわれるように、彼らの無意識的な反抗は、社会批判の意識と照応していることを見逃してはならない。著者は今日のアメリカが過去二世代にわたつて如何にドラスティックに変化したか、その「慢性的変動」——科学的革新とテクノロジーの変化——がアメリカ生活の深い緊張の原因をなしていることをまず指摘する。歴史の進歩観はアメリカ人の特質であった。確かに、かつて個人は歴史のなかで歴史を形成する主体であった。しかし社会変動がある点を超えて加速化すると、歴史的变化はあまりに非連続的となり、人びとは過去および未来との連続性の感覚を維持し得なくなろう。そして現在のみへ没入するという新しい時間感覚は歴史の進歩を信ずることを不可能にし、過去との心理的距離感を深めつつ、歴史喪失、故郷喪失を余儀なくさせる。われわれが同時に、未来のヴィジョンを喪失するのにもまさにかかる時代においてなのである。「ニートピアの没落」が今や現実となつている。

ニートピアの価値転換！かかる現象は過去五十年間に最も顕著にあらわれたとはいえず、その根底は近代西欧の思想のなかに深く横たわつていたのである。ケニストンのいう「積極的神話の知性化」と「知的イデオロギーの暴露」として、中世的秩序の崩壊以来、生命なき理性のイデオロギーと墮落した情念のイデオロギーはたがい

に對立しつつ、さまざまな意匠を織りなして今日にいたつてゐる。それ故に、『フランス革命このかた西欧の思想史の大部分は、これら二つの對立するイデオロギーの間の交錯として解釈され得るし、近代における積極的かつ生命力ある公共的神話の破壊もこれらの闘争に多くを負うている』(三三四頁)といつてよい。そしてユートピア思想というものは、本源的には理性的存在としての人間が未来社会の可能性を想像し、現実化し得るといふ信念より生ずるとすれば、今日その没落は余りにも明白である。理性は非合理性の前にまったく無力な存在であり、知性の創造——科学とテクノロジ——はもはや破壊の道具でしかない。シュベングラのいわゆる『技術主義』はまさに文明の没落を告げる兆候であるかに思われる。われわれの想像力は、理性と情熱との新しい綜合に向うことなく、両者の分裂と低落によつて混沌、破壊、頹廢という否定的イメージに囚われている。ハクスレーの『すばらしき新世界』、オウエルの『一九八四年』を見よ。ユートピアは逆ユートピアになつたのだ。

このような光景はアメリカ人の日常生活の何処にも容易に見出される。貪婪、犯罪、残虐、暴力、性、そして興奮と倦怠、権力追求、あらゆる禁じられたものが雑誌、マス・メディアに氾濫している。しかしそれらは現実には不必要に抑圧されている。アメリカ社会の要求するものは認識的な自我、テクノロジの自我にはかならない。アメリカ的知性とは分析、還元、計量、比較の能力を意味し、かかる能力を欠如するものは、典型的なアメリカ人といへども多少の差はあれ価値剝奪を感じざるを得ず、精神的な病患に悩まされ

る。ともかくもプロテスタンティズムの倫理もホレイシヨ・アルジャーの魅力も今は消え失せてしまい、若者たちはテクノロジ的の自我の需要を供給するか、それをトータルに拒絶するかのいずれかであり、後者の態度が疎外された者にみられる特徴なのである。ここで注目すべきことは、疎外された者の拒否の態度は自己輕蔑あるいはシニシズムに陥つたものであつて、それ自体においてラディカルな社会変革のイデオロギーを提示してはいないことである。彼らの反ユートピア的思考は、マルクス主義の失敗という歴史的事実の不幸な意識によるところも多いけれども、むしろ「彼らの思考のひとつの基本的な——通常は隠されているが——前提は、暗黙の保守主義の原理である」(一九四頁)。すなわち、彼らは現実の革命的な変化よりもむしろ、変化せざる現実への神秘的な融合を希求しているのである。

テクノロジ的の優位性はゆるがすことができないが、しかしテクノロジ的の社会が強いる人間的犠牲は、疎外されているいかにかわらず、アメリカ社会にとつて中心問題であることは疑いない。「われわれの社会における人間的問題はテクノロジの事実から生じるのではなく、われわれが生活のなかでテクノロジにあたえている最高の地位から生じるのである」(四二二頁)。とすれば、如何なる問題解決が示唆されるであろうか？ 本書の最終章「テクノロジを越えて」は、より人間的な社会をめざす新しいヴィジョンの探究である。インバーンの祖父の時代と今日とはいかに隔つてゐることであろう。物質的充足、経済的安定、優雅な生活——繁栄と

豊かさの夢はもはや夢ではなくなり、人間の努力によつて到達可能な目標となつたのだ。にもかかわらずアメリカの歴史が新しい転換点にさしかかつているというのは、われわれがテクノロジの勝利にのみ頼ることができず、Abundance for all for what? という問いに答えるためには、それを超越しなければならぬところに来ているからなのである。アメリカ人がコミットすべき新しい価値とは何か？ 著者は言う、「われわれが必要とする価値はわれわれ自身の伝統に深く根差している。われわれはそれらを真剣に取り上げさえすればよい」(四三九頁)と。それは西欧思想における人間の全体性あるいは全体的人間性の実現ということである。かつては少数者のものでしかなくつたこの理想像を一般的人間に普遍化すること、貧困と暴政をほぼ克服し得たアメリカ人こそ理性と情熱、倫理と行動を綱いませた全体的人間の徳性にコミットすることができはずだ。そしてそれを支える社会はブルラリステイックな、開かれた社会でなければならぬ。コンフォーミティー——今日のアメリカ人はそれを恐れているけれども、彼らは選択によつてコンフォームしてゐるので、未開社会にはこの問題は生じないわけである——ではなく、多様性を促進するような社会にこそ、さまざまな全体的人間の能力が発揮され得るからである。

ケニストンは、アメリカ人の生活のなかにユートピア的衝動が深く包蔵されているという確信を依然として持つてゐる。かくして、「必要とされることはその衝動をもう一度解放して、より良き社会の創造へ向つてふたたび方向づけることである」(四四四頁)と言う

ことができるのである。これまでテクノロジの社会における疎外された者のいささか決定論的な心象風景をみせつけられてきたものとつては、かかるコミットメントの《再構成》は安易なオプティミズムであるかに思える。しかしこのようなヴィジョンを明確化する際、われわれは疎外された者が現実は何を知覚し、何を求めていたのかを想起すべきである。つぎの言葉はやはりもつと大人なのだ。「現代アメリカ生活のインバーンたちはしばしば自己敗北である。彼らを人間的統合あるいは実現の範例と受けとめることはできない。しかし彼らが逃げようと失敗しながらも求めている目的こそ、統合された、全体的人間のそれ——開放性、創造性、猷身の態度なのである。今日われわれは、彼らの私的な疎外をかがる公的な憧憬へと変形すべき叡知と情熱と勇氣をもつた男女を必要としている。そうすればわれわれは、人びとがかつて知つたどのような社会におけるよりも、かかる憧憬が充分に実現された社会に向つて進みだすこともできよう」(四四七頁)と。

(奈良 和重)